

2012年5月25日

第4回(2011年)「昭和女子大学女性文化研究賞」選考報告

昭和女子大学女性文化研究賞選考委員会

1. 選考経過

2011年度の第4回「昭和女子大学女性文化研究賞」の選考対象は、自薦・他薦を含む単著と共著30点であった。

第1次選考は、2月8日、3月6日の両日に学内選考委員によって行われ、第1次選考基準に沿って候補作として次の単著2点を選んだ(発行月順)。

大橋史恵『現代中国の移住家事労働者—農村—都市関係と再生産労働のジェンダー・ポリティクス』(御茶の水書房 2011年2月)

藤井和佐『農村女性の社会学—地域づくりの男女共同参画』(昭和堂 2011年5月)

これら2点についての第2次(最終)選考は、4月20日に学外選考委員の岡島敦子氏(内閣府男女共同参画局長・仕事と生活の調和推進室長)の出席の下、女性文化研究賞選考委員会で行われた。学外選考委員の辻村みよ子氏(東北大学大学院法学研究科教授)は公務で出席できず、書面で選考評を寄せられ、辻村氏の所見も反映して最終選考が行われた。

検討の結果、候補作2点のうち、研究の成果が、「女性文化研究賞」の趣旨である男女共同参画社会の形成により直接に寄与すると評価された藤井和佐氏の著作に第4回「昭和女子大学女性文化研究賞」を贈呈することを決定した。

2. 選考結果

第4回(2011年)「昭和女子大学女性文化研究賞」受賞作

藤井和佐『農村女性の社会学—地域づくりの男女共同参画』(昭和堂 2011年5月)

3. 受賞作の選考理由

『農村女性の社会学』と名付けられた本書は、現代日本の農村に焦点を当て、地域再生の担い手となる女性リーダーの態様をフィールドワークによって詳細に捉え、女性地域リーダーが育成されるルートと彼女たちの活動指向・地域役割のあり方が、農村における女性の意思決定の場への参画を促進する側面と、反対に男女共同参画に結合しない要因を明らかにした労作である。

選考委員会は、本書が、今後の農村における男女共同参画社会の推進に資する意義と、特に、数少ない農村の女性リーダー育成論としての研究上の価値を高く評価し、受賞を決定した。本書の主対象は農村におかれているが、研究フィールドは漁業地域にも及び、漁村の女性地域リーダーの育成とその実像にも言及している。著者が、「都市とは異なる文化・歴史的文脈におかれた農村の女性たちをリーダー育成の対象とする時、単なるエンパワーメントとは異なる方策が必要となる」と指摘するように、農村・漁村における

女性地域リーダー育成の独自の構造を解き明かしたところに本書の意義がある。

著者は、農村地域における女性リーダーを3つのタイプに分類する。第1は、かつての生活改善グループや農協女性部など女性のみがメンバーである組織のリーダー、換言すると地域女性たちのリーダーである「地域女性リーダー」、第2は、農産物の生産組合や加工・直売組合など成員資格に男女の区別がないグループ・組織における女性のリーダー、第3は、最も女性メンバーが少ない政治的意思決定を行う組織である農業委員会や農協理事会のリーダーである。著者は、第2、第3のリーダーを女性の地域リーダー、すなわち「女性地域リーダー」と名付けている。第1から順次、「生活リーダー」、「経済リーダー」、「政治リーダー」とも呼ばれるこの3タイプは、順に女性がリーダーとなる困難さを表すとともに、女性が政治リーダーに至るまでのルートを意味する。

本書は大きく2部に分かれている。第I部では、第3のタイプの農業・漁業地域で意思決定の場に参画している「女性地域リーダー」を、続く第II部では、地域の意思決定の場に参画せず、その外側でネットワークを形成して活動する「地域女性リーダー」を取りあげ、それぞれの育成過程や活動指向を分析している。

農村において意思決定の場に参画する女性地域リーダーの育成を推進したのは、行政施策としての「女性農業士」制度の展開である。この制度は、農村のリーダー育成事業として1967年に発足した「農業士認定制度」が、「青年農業士」や「指導農業士」として主に男性を認定したなかで、これとは別枠で女性に特化した制度として整備されたものである。2008年現在、全国で7,175人の女性農業士が認定されているが、女性農業士であることは、当該地域において公的な女性リーダーと評価され、ここから農業委員や農協理事が選出されて、女性の政治的意思決定の場へのリクルートメント・ルートとなっている。

1992年に「農村生活マイスター」と呼ばれる女性農業士制度を制定し、これまでに855人(2008年度)の女性が認定された長野県はその先進例である。マイスターから農業委員になった長野県I町のSさんの事例分析からは、農村女性地域リーダーの活動指向が、男性地域リーダーの利益誘導や短期的経済効果の追求というムラの価値観とは異なっており、農業の活性化や地域の振興という内発的動機からグループ活動を母体に、集落(ムラ)や町に留まらない重層的なネットワーク活動を展開して、既存の地域リーダーシップ構造にインパクトを与える可能性が指摘される。とはいえ、農村女性リーダーの誕生には、農家の「跡取り娘」である、あるいは「地域役職者の妻」であるといった帰属的要素が効力を持ち、その選出にイエの論理やムラの論理が有効に活用されているという興味深い発見がある。

一方、地域の意思決定の場の外側で、独自の「場」を築き、農業と地域社会の活性化の一翼を担っているのが「地域女性リーダー」による活動である。女性就農者ネットワークである「グローバルレディ」の活動、農村の女性による起業として着目される果樹栽培を営む地域女性リーダーのグループ活動、個人経営で農産物加工・販売の起業を営む女性リーダーたちの活動を対象とした豊富なフィールドワークからは、地域女性リーダーの独自の活動指向と地域づくりの特徴が浮かび上がる。

女性たちの連帯によるネットワーク活動は、旧来からの地域組織や既存の政治的意思

決定の場を超えた広がりを持ち、人とのつながりや交流に意義と愉しみを見出し、生活者の視点、自然・環境・有機・交流を重視したメンバーの活動指向は、地域づくりに新たな価値観を投入し、そこには男性たちの指向とは異なる「地域」が拓かれている。

しかし反面、集落や町・村といった男性によって秩序化された既成の「地域」に意味を見出さず、地域社会の意思決定の場に参入していかない彼女たちの活動は、就農女性の地位向上や農村における女性の政治参画が遅々として進まない一因ともなっている。そのみならず、料理から発展した食品加工といった既存の女性役割の延長線上にある農村女性の起業や、「生活」重視の価値観は、ジェンダーの再生産と女性役割の固定化をもたらす危険性を持っていることである。

以上のように、本書には、農村女性リーダーの分類や農業士・漁業士育成事業等の政策展開、女性の意思決定参画と「イエの論理とムラの論理」との関係、農村地域における性別役割分業の構造など貴重な分析結果が示され、農村男女共同参画社会の推進への寄与は大きいといえよう。しかし反面、選考委員会では、研究が村落社会を対象としたフィールドワーク的手法に限定されているため、日本の農村漁村の全体構造を鳥瞰することが困難であり、種々の統計を駆使した総論的検討が欲しかった。加えて政策的展望を示すうえで、第2次・第3次男女共同参画基本計画等に示された諸課題やポジティブ・アクションの有効性など、最近の動向の把握が加われば、より充実した内容となったのではないかという意見が出された。今後の研究のさらなる成果を望んでいる。

最後に、もう一つの候補作『現代中国の移住家事労働者』は、30代前半の新進気鋭の女性研究者、大橋史恵氏がお茶の水女子大学に提出した博士学位論文をもとに出版されたものである。中国における計画経済から市場経済への転換過程において家事労働者として働く農村出身女性の都市への移動にどのような政治的力学が働いてきたのかを解明した完成度の高い学術書である。すでに2011年度山川菊枝賞を受賞された秀作である。著者の研究の一層の前進を期待している。